日本離床研究会ファシリテーター　看護グループ

生活場面での離床　患者さんの笑顔を目指して

楠　麻衣*

*医療法人社団 常仁会 牛久愛和総合病院　看護部

【はじめに】

筆者が所属している急性期一般病棟では、食事の時間に車椅子や椅子に座って食事をとることを離床の一環として取り入れている。

しかし、食事の時間や、その日の勤務状況により座って食事をとれる患者がベッド上での食事となってしまう現状がある。移乗に介助を要する患者の食事環境がマンパワーや時間により左右されてしまうためである。

しかし、マンパワーが足りない、時間がないからといって離床せず、ベッドで食事をとることが定着してしまっては患者のためにならない。では、どうしたら看護師や時間が限られる中で離床を推進していけるのか。今回その悩みをファシリテーターで話し合い、２つのアプローチ方法を考えた。

【スタッフの意識変容】

１つ目は、スタッフの意識への働きかけを行った。1）座って食事をすることの意義や効果を教育・啓発、2）実際の反応や変化を伝えていく（座って食事できた時の患者さんの表情や言葉、行動などポジティブな反応ひとつひとつをスタッフと共有できるよう記述化したり、患者さんの承諾を得て写真などに残し可視化していく）という方法である。

例えば、ベッドでは自力摂取できない、食べこぼしがある患者が車椅子に座って食べたら自力摂取できた、食べこぼしが少なくなったといったポジティブな変化を伝えていくことで、車椅子にのって食べてもらおう、もしかしたらこの患者も車椅子だったら自力摂取できるかもしれない、という思いになることが考えられる。

【組織への働きかけ】

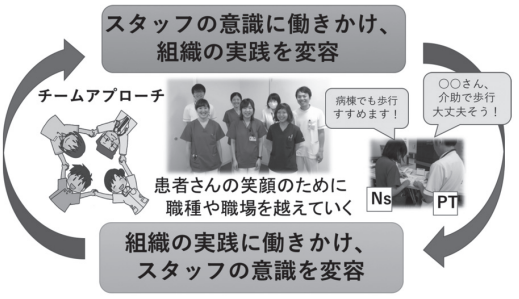
２つ目は、組織の実践への働きかけである。1）他病棟や他職種間の協力も得て、患者さんや家族に説明した上で食前は車椅子に座ってもらうことを病棟のルールとして導入する、2）看護師の業務負担を減らすため業務内容を見直す、3）離床基準を決めてプロトコルに沿って離床をすすめる、4）昼食と同じ人数を朝・夕も移乗してもらうのは難しいため、曜日を決めてこの人は朝・夕も車椅子に乗ってもらうなど、患者選定をする、といった方法をあげた。

２つ目の組織への働きかけに対しての意見が多く、組織への働きかけに注力した介入を行うことがより効果的かつ実践的な方法だと考えられる。

実際に介護士や学生の協力を得て、食堂での食事が標準化されている、といった意見もあった。

【まとめ】

スタッフの意識に働きかけ組織を変容、組織の実践に働きかけることで意識も変容され、この２つの働きかけは互いに独立するのではなく相互作用の関係にあると考えられる。

また、これらの実践を１人で行なっていくことは容易なことではなく、リーダーシップをとっていく存在が重要となる。

医師、看護師、セラピスト等多職種が協働し、患者さんの笑顔を目指して時間やマンパワーに負けない離床環境を構築してくことが必要である。